Middlemarch
1. Dorothea の Mr. Casaubon との結婚における過ちについて

嶋　田　貴美子

(10)

Dorothea が Casaubon と結婚してからその夫 Casaubon が不慮の死を遂げるまでのおよそ一年半ほどのこの期間は，作者 George Eliot の最初の本格的な小説 *Adam Bede* の中の，頑固で融通のきかなかった主人公 Adam Bede が，思いがけない父親の死に遭遇したことと，軽薄な Hetty Sorrel を愛したことによって他への寛容と共感を学んだのと全く同様に，向こうみずで非現実的であった Dorothea がすさまじい葛藤の中で他への妥協[(1)]と忍耐とを学んだ，彼女の精神的な成長の過程であり，そしてさらには自分の人生への諦念にまでいたった精神の，苛酷な遍歴の過程でもあった。しかし，この二つの小説の中にはそのように共通して，それぞれの主人公の人間的な成長が描かれているとはいえ，Adam Bede の場合は彼の頑固で融通のきかないその特性は，彼が人生を生きていく上で大きな障害になる性格的な欠陥であったのに対して，Dorothea の高い理想に向かい全き善を追い求めようとする性格は，時には egoistic な面を露呈して，因襲的な Middlemarch の人々には異端と見なされた原因でもあったが，個を大切にする近代的な視点ではそれ自体が彼女の美点なのであって，それを失うことは確かに一面的には人間としての一つの成長ではあったとしても，Adam Bede が他への寛容と共感を学ぶことにより彼を取りまく世界の明るい再生があったのとは，当然大きな意味の相違を持つ。というのは Dorothea のそれまでの教育の中で獲得された Puritanism の上に立って理想に向かう燃えるような情熱は，作者の George Eliot に Dorothea を現代版 Saint Theresa とみなさせたすばらしい特性であったのであるが，そのすべてを Dorothea は Casaubon[(2)] との失意の結婚の中で結婚というくびきの下に現実への忍耐と他への妥協，将来への諦念にむりやり屈しさせざるをえなかったのであった。それは言いかえれば Dorothea の崇高な魂の自己滅却であって，ひじょうに残酷な，運命の彼女への punishment でもあったのである。Dorothea がこのような状況に至る過程についてはこれまで十分にみてきはしたが，ここで今すこし補足し，そして改めて整理してみたい。

George Eliot の小説はほとんどすべてにおいて，主要な character にはそれの Antithese としての character が用意されている。Dorothea の Antithese は，*Middlemarch* を一読すれば一目瞭然のことであるが，Middlemarch の町の市長で，工場長でもある bourgeois, Vincy 氏の娘 Rosamond である。Dorothea と Rosamond は，その持てる美貌の特質，日常的なものの考え方，人生の理想などなどにおいて，ことごとく著しい対照をなす。それは彼女たちが極めて異なる出生と，家庭環境を持っていたということからくる相違であろう。具体

的に言えば Dorothea が，当時はまだ Rosamond も含めた一般の人々が神々を見るような目でしか見られない gentry 階級の女性であり，一方 Rosamond は常にそういう身分にある Dorothea を羨望の目でながめている，[3] 階級に対する絶対的なコンプレックスを持った女性であった。しかし Vincy 家でしばしば催された晩餐会に集う，Middlemarch の一般の市民たちの間の，Dorothea と Rosamond の美貌についての談義では，Rosamond の方が断然高い評価を得ていた。それは1831年といえども時代を超越してしまっているかのように平穏な閉塞的な地方共同体[4]である Middlemarch[5] に住む人々の保守性が，Dorothea のはっきりとした自我を表明した個性的な美しさよりも，日々を楽しく暮らすことによって人生の不安を忘れようとする父親 Vincy 氏の人生観を受けついだ Rosamond の，外面的な，陽気で開放的な美しさをより好んだということであろう。Middlemarch の人々の目には，Roma の Vatican 美術館で Dorothea をかいま見た画家 Naumann をうならせた，Dorothea の持つ，そこの彫刻に刻まれた Ariadne の美しさに優るとも劣らない生命に息づく美しさや，その友人の賛辞に啓発された Will の認めた[6] Dorothea の気高い内面が表明された神々しいまでの美しさは，とうとう最後まで発見されることはなかった。Dorothea の，Naumann によって表現された「胸に何世紀にもわたる Christian が（しっかりと）意識された」その美しさは，上に述べたような easy-taking な人生を送ることに何の疑問も感じずに，[7] 逆にそのわくからはみ出した個人的な考えというものを危険視する Middlemarch の町の人々にはいかにも好まれそうもない美しさであったのである。その Dorothea の美の特色は，すなわち Dorothea の Middlemarch における存在を物語るものであり，Dorothea はもともと Middlemarch という地域社会に溶け込めない異端者であったのであり，そういう意味では Casaubon 家に引きとられ Casaubon の庇護の下にある青年 Will Ladislaw や，最近 Middlemarch に越して来た青年医師 Lydgate と共通点を持った character であったのである。gentry 階級がいまだなお社会的には神々のような地位を占め，上流階級の中に現状に満足した沈滞ムードがある社会においては，理想を追い求めること自体が異端となり，異端者でありながらその理想を実現することは至難の業であり，かくして Dorothea も Lydgate も Middlemarch において彼らの人生に挫折したのであった。そして彼らは二人とも結婚を契機にして挫折の道を歩み始めたのである。

Lydgate の妻となった，Dorothea の Antithese である Rosamond はその美貌を盾にして高い身分にのし上がることを願っている俗人であることは当の Lydgate もあらかたわかっていたことであったが，日曜の度に為になる説教をし，あれほど高潔な牧師兼学者にみえた Casaubon が，Rosamond に負けず劣らずの Middlemarch の俗人であったことは Dorothea も驚くべきことであった。しかし青年医師 Lydgate が最後まで失意の人生を送ったのに対して，Dorothea の場合は二度と彼女の内に再生されることのなかった自己滅却はあったものの，若い彼女の人生のほんの一部でしかない一年半ほどの挫折であり，また，Casaubon との結婚生活の無意味さを決定付ける Casaubon の最後にして最大の依頼であった，*Key to All Mythologies* を自分亡き後は代わってそれを完成させてくれという要望を，拒否することに

なった結末は，自分で選び，おごそかに神に誓った結婚のきずなへの忠誠と精神のやさしさのためからくる Dorothea の半狂乱の後悔はあったけれども，そこまでに到った Dorothea の心の中で行われた，まさに死闘を見てきた読者に対しては一抹の救いを与えてくれるものでもある。つまり，Casaubon の不慮の死に遭遇して正気を失った Dorothea の口をついて出た，'I am ready to promise. Only, thinking about it was so dreadful—it has made me ill.' という言葉からもわかるように，Dorothea が夫のその依頼を受け入れることを覚悟するまでの苦悩は並たいていのものではなく，I am ready to promise とは言っているものの，決意は最後の最後までゆれ動き，そのやっと行きついた決意も，Casaubon からの freedom を希求する自分の意志を次のような妥協と諦念に服させた賜であったのである。

彼女は自分自身の運命を「はい」とすなおに受け入れてしまいそうな気がした。彼女の神経はすっかり弱っていて，夫の体に鋭い刃の一撃を与えはしないかということを考えると恐しくてたまらなくなり，全くすなおに夫の言うことに従うほかは何もできなかったのである。……

庭のじゃり道に出ると，彼女は近くの木立の中をさまよい，先に進むのをためらっていた。……今や彼女は自分がしりごみしている仲間と我身を結びつけざるを得なくなるのであろうと思われるその場所に行くのが恐しかった。法律も世論も彼女にこれを強制はしない。ただ夫の性格と彼女自身の同情があるだけであった。そしてそれは結婚の現実的なくびきではなく，理想としての結婚のくびきであった。…彼女は足かせをはめられていたのである。彼女は彼女の心に嘆願している手負いの魂をさらに打ちのめすことはできなかった。もしそれが弱さというものであるなら，Dorothea は弱かった。
(chap. 48)

かつての十八歳の少女 Dorothea の結婚観を崇高に彩っていた higher duties の意識は，ここではすっかり色あせた厳しい duty と submission にその姿をかえ，Dorothea は，自分の将来をも絶対的に拘束しようとする結婚という形態の中にある，それまで思っても見なかった目に見えない強い拘束力に恐れおののいているのである。しかしこの引用文を見ればわかるように，Dorothea が Casaubon からの依頼に対する結論を出すのにこれほど悩み苦しんでいる原因はそのような Dorothea のひとりよがりの恐れだけにあったのではない。Casaubon は自分の学問の研究領域には Dorothea がいくらそれを望んだとしても決して招き入れることはなかったのであったが，それでも彼の側で細々としたことを手伝ってきた一年半ほどの間に，夫 Casaubon の目ざしている大作である *Key to All Mythologies* が何の展望も充足される確かな実りも全く期待できないものであるということがわかった Dorothea には，もはや三十年ほどにも及ぶ人生のすべてをかけて精進し，それが完成された暁には自分をないがしろにしているようにみえる世間をあっと思わせるに違いないと今もなお信じて疑わない Casaubon への同情と哀れみ，すなわち愛の片鱗すらもはや示してくれない夫ではあれ，彼に対する寛容と共感があったのである。その同情と哀れみが，Casaubon の死後も彼の生前と何ら変わることのない妻としての duty と submission に生きる決意をぎりぎりのところで Dorothea にさせたのであった。George Eliot は，Dorothea があたら若い命の滅却を意味するそのような最悪の決意を愛なき夫への哀れみと同情の念で行ったことに対して，この引用文の中で「それが弱さというものであるなら，Dorothea は弱かった」と言っているが，それ

をさせたものは Dorothea の弱さでは決してない。むしろ，自分の主張に一貫性がなく，自ら進んで殉教者になろうとしてはそれを取り消していたという娘時代に比べれば，病弱で力不足の学者である Casaubon とのたった一年半ほどであったのにその短い結婚生活を通じて[(8)] Dorothea は何と強い女性に変貌を遂げたことであろうか。そしてその強さは *Adam Bede* の中の聖女 DinahMorrisの強さではなくて，そして George Eliot が Dorothea の中に見た Saint Theresa の強さでもなく[(9)]，過ちを犯す人間の愚かさを持ちながら，それから逃げずひるまず，その過ちの責任を生涯負っていこうとする人間的な精神的成長を意味するものであった。それはあくまで Middlemarch の市民的意識の基礎から見られた未完成部分の完成ではあったけれども。しかし Dorothea の若さと Casaubon から引き継いだその研究の空しさを考え合わせるとき，Dorothea の心の中の，激しい葛藤の後に行きついた諦念，すなわち自己滅却に近代的な思考パターンが許される読者は限りない sympathy と共にはかり知れないやり切れなさとを感じるのである。そういった Dorothea の心に対する読者の緊張感を解いたのが，散歩の途中の summer-house での，心臓発作による Casaubon の死であった。Dorothea は Casaubon の死によって Lydgate の人生のような全き挫折から辛うじて救われたのである。

しかし Casaubon の側からすれば，Dorothea が Casaubon の申し出に返答をしぶり，生きた彼の耳に良い返事をきかせることができなかったということは，夫としての Casaubon を Dorothea が拒否したことを意味した。庭の summer-house のベンチにただ一人すわって Dorothea の返事を待ちながら死を迎えるまでの Casaubon の心中は言い知れない寂しさがたれこめていたことであろう。Dorothea が夫の学問を不毛なものと思い，夫の研究の成果となるはずの *Key to All Mythologies* の完成は全く不可能であるとひそかに断定していたとしても，Casaubon にとってのそれは，三十年ほどの人生を通じて自分の前途に光彩を放ち，そして今もなおそのまぶしさが少しも衰えてはいない魅力的な学問的テーマなのであった。その研究を業半ばにして死を迎えなければならないとするのであれば，そのテーマについての研究の達成を妻の聡明さと若さにすがるのは，彼の成し得る唯一にして最善の行為だったのである。ところが Dorothea は結果として無言の拒否を表明したのである。その時の Casaubon の失意は，Dorothea が現実の夫の中に偉人の姿を発見することができずに Casaubon と共に暮らす自分の現在と将来に対して感じた失望よりもはるかに大きいものであったであろう。Casaubon もまた人生に挫折した者の一人であって，その挫折は Casaubon 本人にとっては Dorothea や Lydgate のそれよりもずっと劇的で苛酷なものであったはずである。しかし読者が Dorothea や Lydgate に対するほどの同情を彼に抱くことができないのは，Dorothea と Lydgate が多少 egoist ではあったとしても本質的には純粋で善人であったのに比べて，Casaubon が次々に露呈していく性格の醜さゆえのことであった。

Casaubon と Dorothea の結婚はこのようにして Casaubon の死によって思いもかけない破局を迎えたのであった。その失敗の直接的な原因は，これまで十分みてきたとおり，周囲の Sir James Chettam との結婚のうわさに反発した18歳の少女 Dorothea が，折よく巡り合った Casaubon の中に偉人の幻影を見たことであったが，彼らの結婚における Dorothea の不

幸は，彼女が Casaubon の中に見たその幻がたちまちにして消えていったということのためばかりではない。Dorothea を不幸にした根本的なものは，Casaubon の心の中では愛が全く枯渇していて，Dorothea の内からあふれ出る同情や哀れみや温かい思いやりをすなおに受け入れる許容量が全くなかったということであった。

Dorothea が Casaubon を深く愛していたということはありえなかったが，それでも彼女は持ち前の Saint Theresa 的な弱者に対する同情に根ざした性格から常に夫のことに思いを巡らせるだけのやさしさは持っていた。しかし一方 Casaubon の Dorothea への愛は，考えられないほど希薄である。Casaubon は Dorothea への求婚のための手紙の中で確かに affection という言葉で Dorothea への愛を告白しているが，自分の Dorothea への気持を表明したのは後にも先にもそれが一度きりのことであった。しかし Puritanism にのっとった禁欲的な教育の影響と崇高な理想に裏打ちされた結婚前の，世なれていない18歳の少女 Dorothea には，Casaubon の心の中の，自分への love の不在は，全く取るに足らないことと思われたのである。かつて Celia が Sir James の Dorothea への気持を Dorothea に伝えているとき，'he has began to feel quite sure that you are fond of him' と言ったことがあった。すると Dorothea は，'Fond of him, Celia! How can you choose such odious expressions?' (chap. 4) とむきになって言い返す。さらに Celia が自分の夫になる人への感情として 'Fond of' (10) という言葉を使うのは妥当であるというのに対して Dorothea はそれは全く妥当ではないとつっぱねている。その言葉通りに Dorothea は，いかにも 'Fond of' や 'love' (11) という言葉を引き出しにくく，もし彼に他への愛がありそして他が彼に愛を感じると仮定すれば 'affection' (12) という言葉が一番ふさわしい初老の，牧師兼学者である Casaubon を夫に選んだのであったが，結婚前の Dorothea には，たとえそれが夫婦間の感情であろうとも 'Fond of' や 'love' よりも 'affection' の方がより高尚なものであるという考え方があったようである。

しかし人類の祖である Adam と Eve の間にあったものは紛れもなく love であり，また彼らの創造主である神と彼らの間にあったものも love であって，(13) love は人間のもっとも本源的な感情の一つだったのである。特に a man is united with his wife, and they become one (13) となるべき結婚において，love を絶対かつ必要条件とは考えなかった Dorothea は，そもそも (14) Casaubon を夫に選んだその最初から人生の過ちを犯していたのである。それは18歳というまだ少女の，高い理想の陰に隠された未熟な精神の成せる業であったであろう。しかし発端はそうであっても Casaubon との結婚生活を続けていくうちに Dorothea は，理想の崩壊とは別の問題として，愛なき結婚に疑問を感じ始め限りない寂しさを感じるようになっていくのである。Casaubon の生前二人の会話の中には duty ということばが数多く使われている中で，Dorothea は一度だけ love という言葉を使ったことがあった。それは Will への夫の jealousy にあいそがつきて，夫との間に気まずい空気が流れていた折も折，ちょうど執り行なわれた Featherstone 老人の葬儀を数人の知人と窓から見ていたときである。Dorothea は 'I cannot bear to think that anyone should die and leave no love behind' と言って，意地悪で強欲でやさしさのかけらもなかった一人暮らしのその老人と夫 Casaubon をダブら

せているがこれは，夫であり妻であるものの間の love の重要性に目覚め始めた Dorothea の，夫 Casaubon によびかけた魂の叫びのようにきこえる。

Casaubon と Dorothea を結びつけたものはお互いの心の崇高な理性であったが，人は理性だけでは結婚生活を続けていくことはできず，彼らの結婚の失敗は根本的には，一人の男性と女性の，すなわち異性の union である結婚の前提であるべきものとしての love の欠如にあったのである。そういう観点からこの Casaubon と Dorothea の結婚とその失敗を考えるとき，常に念頭に浮かぶのは，Shakespeare が *Othello* の中で描いている Othello と Desdemona の結婚とその破綻である。George Eliot[15] がこの[16] Dorothea と Casaubon の結婚の story を執筆しようと思いたったとき，幾分なりとも *Othello* の劇が念頭にあったかどうかは定かではないが，Dorothea が Sir James の愛を退けて Casaubon との婚約を公にしたとき，George Eliot はそういう Dorothea に対して，*Othello* の中で熱心な求婚者であった Venetian genlleman, Roderigo を拒絶して誰もが嫌う黒人 Othello と電撃的に結婚した Desdemona の名前を付しているところをみると，ある程度は *Othello* の story を意識していたようにも思われる。そこで思い切って[17]次の章で，*Othello* の劇と Dorothea, Casaubon の結婚の story との類似性を検証し，Dorothea と Casaubon の結婚の失敗の原因を，Dorothea の理想の崩壊とは別の，もう一つの失敗の原因と思われる，そしてどちらかというとこれの方が重要視されなければならない二人の間の love の欠如という観点から明らかにしてみたい。

(11)

周知のように Shakespeare は，今から四百年ほども前に数々の文学作品を創作し，そのそれぞれの作品の中において不朽の人間像を描き出した，世界の文学史上においても類まれな優れた文学者である。彼の作品の中でも特に有名な四大悲劇の一つである *Othello* は，Duke of Venice に仕える軍の最高司令官である Othello 将軍（general）が主人公になっている drama であって，死に面した彼自身が自ら語っているように「愛することを知らずして愛しすぎた男の身の上，めったに猜疑に身を委ねはせぬが，悪だくみにあって，すっかり取りみだしてしまった一人の男の物語」である。Shakespeare の四大悲劇のうちの他の三つの悲劇のすべてが王侯貴族を主要な登場人物[18]とし，富や名声や国王という絶対的な地位等々に対する世俗的な欲望や野心を持つ人間の業が招く悲劇をテーマにしているのに比して，*Othello* は上の引用文からもわかるように，love, suspicion, jealousy, そして revenge（復讐心）が Iago の奸計にたくみにあやつられたあげくの悲劇であって，人間の内面にしぼって視点が置かれた悲劇としてそのテーマの取り方にひじょうに近代的なものを感じるのである。そして *Othello* の悲劇の要素となっているその love, suspicion, jealousy, revenge は，love については Will Ladislaw がからみ，*Othello* ほどの激しさはないものの，それらすべてが Middlmarch の中の Casaubon と Dorothea の結婚とその破綻の story を構成している心理的な素材となっているのである。

Othello, Desdemona と Casaubon, Dorothea の二組の couple にみられるまず最初の類似性は，彼らが結婚するにいたるその動機である。Othello は堅実な Venice の市民であるならば誰も娘を嫁にやりたくないと強く思うような黒人[19]であり，武人という職務柄，定住すべき家を持ってはいない。その上 drama の中で Desdemona との年の差のことがしばしば話題にされているところをみると，前途に明るい未来が開けた青年といえるほど若くもない。しかし Othello 自身は，Moor 人[19]ではあるものの人となり貴族であり，自ら天職と考える武人としての最高位にある現在，他の Venetian が毛嫌いしている黒い肌も，結婚の適齢期を過ぎたその年齢についても，Desdemona の夫となる上での劣等意識は全く持ってはいない。Othello と Desdemona との最初の出会いは，Venice の議官(senator)であった Desdemona の父 Brabantio が Othello を自宅に招いた時であった。その時 Othello が語った武人として生きてきた波瀾万丈の半生の物語に，Desdemona は今だかつてどんな Venice の立派な求婚者にも感じたことのない鮮烈な共感を感じたのである。そしてこの，Desdemona の Othello の人生への共感は，Middlemarch の貴族である Dorothea のおじ Brooke 氏が Casaubon を自宅に招いた折に彼と初めて会った Dorothea が，その時彼女の結婚相手の最有力候補と目されていた Sir James の地主としての安穏な生活とは全く異質の，Casaubon 自らが誇らかに語った学者としての大望とそれを達成せんがための辛苦勉励の彼の学究生活に感じた，胸の熱くなるような共感とまさに同じ類のものであった。

この *Middlemarch* の小説についての論文の(2)の章でみてきたように，Casaubon もまた，彼自身には Othello が黒人であったというほどの客観的[20]かつ明確な人々の嫌悪の根拠はないものの，Dorothea の妹 Celia が 'How very ugly Mr. Casaubon is!' と驚いたほど一般的には醜い人の部類に属し，その上 Othello よりもさらにはるかに年を重ねたもはや初老期に入った学者であって，Middlemarch の上流階級の人なら誰も自分の娘の結婚の相手とは考えたくない人であった。しかし Othello が自分に対する周囲の嫌悪感には全く鈍感であったのと同様に，それら Celia が Casaubon に対して抱くその風貌への嫌悪感や周囲の人々が感じる人間性の欠けた，風変わりでもはや初老期にある学者牧師であるという彼への毛嫌いの理由には Casaubon 自身は全く気付くことはなく，十八歳の崇高ともいえる美貌を持った少女 Dorothea の夫になることへの劣等感や違和感は全く感じてはいない。

そのように Othello, Casaubon が，周囲の人たちが彼らに抱く客観的な否定的評価に対して，共通して全く無関心であったのは，彼らが何物にも侵されることを許さない高い自尊心を持っていたからである。そしてその自尊心は，彼らがもともとは高貴な生まれであるということと，彼らがそれぞれに携わっている特殊な職務と，それまで生きてきたその特殊な人生への愛着心から生まれたものであった。つまり Othello は実に七歳の時からすでに戦場に出で，多分三十歳の半ばほどには達していると思われるその時まで，数々の戦功をあげた有能な武人としての人生を歩んできているまさに武人の中の武人であり，Casaubon もまた，Middlemarch の牧師の妻で街のことには殊のほか詳しい Cadwallader 夫人が「あの方は小さい時に『親指太郎』[21]の摘要書を作ったそうよ。それから今日まであの方はずっと摘要書を作り続け

ているのですものね」と証言していることからもわかるように，Othello の武人としての能力ほどのものがあったかどうかは定かではないが，学者として歩んできた自分の人生に何の疑問も抱くことのない天性の学者である。[22] 武人と学者すなわち実践と論理，さらに言えば力と思考という各々異なる世界に生きてはいたが，人生の目標が世俗になく，長いキャリアと実績だけしか意味を持たない，孤独な職務に生きてきた Othello と Casaubon にとっては，外見の美醜は全く問題ではなく，そして年齢は年功であり，たとえそれが若い女性との結婚の悪条件であったとしても，それをかえって誇らしく思いこそすれ，劣等感を抱く要因であるとは全く考えられなかったのである。

そのようにまさに子供の頃からの長い人生を世間とは隔絶したところで過してきた人の一番の弱点は，Othello 自身が「だから俺はこの広い世間のことは何も話すことはできない（わからない）」と言っているように，世間に全く疎いというその特性であろう。[23] この特性も彼らが自分の属する世界に留まっている限りにおいては全く問題はないのであるが，もっとも人間的な営みであり，世俗的な独自の社会を構成する結婚は，彼らにその不得意な this great world への参入を強要するものであって，Casaubon と Dorothea の突然の婚約を知った Sir James の「結婚なんかしないで自分の著書を出版したらよいのに」という Casaubon への非難の声のとおり，彼らには結婚と職務は全く別のところにあるべきものであって，それらを両立させるのは決してなまやさしいことではなかった。すなわち彼らは結婚して夫となることに適応できない性質であったのである。しかしその特性については彼ら自身もよく知っていて，Desdemona, Dorothea との彼らの結婚は彼らの方から求めて得たものではなかった。自分の職務に愛と誇りを持ち，それに専心することにこの上ない幸せと喜びを感じていた彼らにとっては，これまでもこれからも結婚が自分の人生に大きな意味を持つ望ましいものであるということは全く考えてはいなかったのである。そういう Othello と Casaubon がそれぞれ Desdemona, Dorothea に会うやいなや，たちまち結婚を決意したのは，彼女たちの彼らへの愛がごく一般的な女性が特定の男性に寄せる思慕や愛とは全く異なり，彼らの誇りとする職務を全面的に受け入れた極めて特殊な愛の形態を持っていたからであった。すなわち Othello が Act I, Scene III で，Desdemona の自分への愛と自分の彼女への愛の性格，それから自分と彼女との周囲の人の目をあざむいた電撃的な結婚について釈明しているように，「Desdemona は Othello が戦場でかいくぐってきた危険な経験ゆえに Othello を愛したのであり，Othello は彼女がそのことを哀れに思ってくれたために彼女を愛した」のであって「もし Othello があのしとやかな Desdemona を愛していなかったならその放浪[24]の自由な境涯をたとえあらゆる海の幸との引きかえであろうとも，柵の中にその身を閉じこめるようなことはしなかった」のである。Othello のこの言葉は一見 Desdemona と Othello との間のひじょうに力強い大きな愛を謳い上げているように見えるけれども，よく吟味してみると，彼らの愛の結末をすでにそこに見るような恐ろしいもろい愛の姿が見え隠れしているのに気付く。Desdemona は人間 Othello を愛したのではなく，過去に豊富な武勇伝を持つ武人の中の武人である将軍 Othello を愛したのであって，そして Othello の彼女への愛もまた人間 Desdemona へのものではな

く，Desdemona の自分への sympathy ゆえの愛というひじょうに消極的なものであったのである。一方 Casaubon が Dorothea と結婚を決意したいきさつについては次のような彼の Dorothea への求婚の手紙においてめずらしく彼自身の言葉で告白されているが，そこにわれわれはまた，Othello と Desdemona の結婚の過程とのかなり明白な類似性を発見することができるのである。

> …あなたとお知り合いになれたのと時を同じくして，私の人生にある必要感が生じたということは，単に時の一致以上のより深い意義を認めても間違いないものと私は確信致します。…先日の会話で私の人生の方針と目標は十分理解して下さったものと思います。その方針が極一般的な世間の人の持つものとは相いれないものであることは私もよくわかっています。でも私はあなたの中に思想の向上と献身の力があることを見てとりました。堅実な資質と魅力的な資質とを兼ね備え，容易ならざる研究の折には援助をおしまず，無為の時間の憂さをその魅力で晴らしてくれるような，このたぐいまれな人に出会えたことは，この上もない望ましいできごとでありました。…もし，あなたに御紹介いただかなかったなら，結婚の契りによって，この孤独な境涯に光を当てるなどというようなことは考えもせずに，私は最後まで多分今まで通りの生活を続けていくことになったでしょう。
> (chap. 5)

つまり五十歳にもなろうとする Casaubon に Dorothea との結婚を決意させたものは，彼が Dorothea の中に彼の欠けている若さというものへの必要感 (consciousness of need) の他に，思想の向上と献身の力を認めたということであった。特に献身の力 (a capability of devotedness)，すなわち Casaubon が女性の持つ最高の美徳とする an ardent self-sacrificing affection を Dorothea の中に認めたということが決定的なものであったのである。もう少し具体的に言えば Dorothea は，Celia がとても醜いと思い同席するのさえいやだと思う Casaubon の顔に Locke の面影を見い出して，たちまち彼の足下にひれふしたくなるような崇敬の念を持ち，初老の境にさしかかって体力が衰え，そして学者として大きな障害となる視力も低下してきた Casaubon の研究生活を助けることに至高の幸福を見い出したということである。すなわち Dorothea は，Desdemona の Othello への愛と同様に，人間 Casaubon を愛したのではなく，彼の中に Dorothea が勝手に見出した偉人 Casaubon に強い自己犠牲的愛情を抱いたのであった。Casaubon はまた Casaubon で体力の衰えや視力の低下が従来の学究生活を続行することに及ぼす危機感を持っていて，その危機感が，同情されることや弱みを見せることを殊の他嫌う Casaubon に consciousness of need という Dorothea への援助を求める言葉を吐露させ，Dorothea の彼に対する自己犠牲的愛情をさらにあおったのであった。Casaubon は，自分の日常のすべてであり，自分の存在のすべてであるその研究を生涯続行できる幸せの獲得のために，Dorothea の若さとその an ardent self-sacrificing affection, さらにそれに加えて真摯に学問に向かおうとする Dorothea の堅実な聡明さに，枯渇した愛の最後の一滴を注いで Dorothea を獲得したのであった。すなわちこの論文の chapter10でみてきたとおり人間のもっとも本源的なものであるべき結婚が Othello, Desdemona と Casaubon, Dorothea の結婚にいたっては，往々にして人間が持っている仮面の下で行なわれたものであり，特に，早くに母親を亡くしてはいたものの，Venice の上流階級の家に育ち

Senator をしている父親の愛を一身に受けて何の苦労も知らずして育てられた Desdemona の，国籍や人種，宗教，年齢，そして肌の色も全く異なる Othello との向こうみずな結婚，それから Dorothea の Puritanism に裏打ちされた禁欲的な性質と，自分を高めることへの燃えるような願望を，父親ほどにも年の離れた Casaubon の中に電撃的に認めた偉人の相に托そうとしたその思い切った決断とに，すでに彼女たちの結婚の悲劇的結末が暗示されているのである。自己犠牲的な愛は人間の持つ感情の中で最高に美しい。そして悲劇は人間の持つそういった美しいものを理不尽に壊すところにあるのではないだろうか。

Shakespeare も George Eliot も人間の悲運を Nemesis の概念で解決しようとする傾向が強い。Desdemona がまさに少女のような純真さでいちずに[25]愛した夫 Othello の手によって，このようにむごい方法で殺されなければならなかったほどの Nemesis は，いったいどこにあると Shakespeare は[26]考えていたのであろうか。また Dorothea が崇高な殉教的な愛を Casaubon に抱き，勇敢にも彼との結婚を選んだのにもかかわらず，まもなく Casaubon によって理想の達成の意味においても人間としての愛においても次々と裏切られ，二年もたたないうちに孤独にうちひしがれた生活に追い込まれざるを得なかったことに対する Nemesis を George Eliot はどこに見出していたのであろうか。これについて Shakespeare も George Eliot も彼らの heroine に同じ弱点を見出していた。Desdemona も Dorothea も，人の視方に対してはそれがある一つの基準を成すという意味ではとても大切である世間一般の平均的な目，すなわち常識的な目を持つことが学習されていずに，他の人々の運命と微妙にからみ合っていくことになる結婚もただ一人の判断でたちまち敢行してしまう，ある意味では鼻もちならない egoist であったのである。それは彼女たちが共に早くに母親を亡くし，父親または父親に代わる人の手厚い被護の下に多感な少女時代を過ごしていたための弊害でもあったであろう。非凡なものに共感し，それに向かってまっしぐらに突き進もうとするいちずなけなげさ純真さという美点と表裏一体を成す欠点であるエゴイスティックな性格が，言うなれば Desdemona には惨殺を，そして Dorothea には気も狂わんばかりの葛藤をもたらした原因なのであった。しかし彼女たちのエゴティズムが対社会的には大いに批判されるものであったとしても，一時的なりとも夫たちにはひじょうに歓迎されるものであったのであり，それが非道徳的，あるいは不正な作為と結びつくことは決してなかったのにもかかわらず，それに対するそれほどの Nemesis が Desdemona と Dorothea にあっていいものかどうかという疑問がどうしても余韻となって残るのである。そういう不条理な彼女たちの人生が *Othello* の drama と Dorothea の story の悲劇性を高める素材になっているのであるが，そのような観衆や読者の納得できない点を解消するために，Shakespeare は，心身共に清らかな Desdemona に不実の嫌疑をかけ犯行に及んだ Othello に対し，Othello の命とも言うべき将軍 (general) の地位の剝奪と，我身を刺し殺すざんげと狂気の中に彼を追い込んだのであり，また George Eliot は Dorothea に Casaubon の死後，彼との運命的な結婚からの再生である Will Ladislaw との恋と結婚を用意したのであった。

彼女たちへの Nemesis とは別に，*Othello* の劇と Casaubon と Dorothea の story の中

に見られる悲劇の直接的な原因は，Othello と Casaubon の側の jealousy であるということができるであろう。愛と jealousy は一対になって，人間がこの世に誕生して以来最初に人間の心の中に芽ばえた感情であり，これまでいかにその目から涙を流したことのない非人間的な Othello であり，そしてずっとはるかに以前に心の中に愛が枯渇してしまっていた Casaubon であろうとも，自分にとって好都合な愛が身近にもたらされるや jealousy が彼等の心に起こる可能性は十分ありうるのである。

すでにみてきたとおり Desdemona と Othello の愛は，Dorothea が Casaubon に抱いた愛と同じ種類の Desdemona の自己犠牲的愛情に支えられて芽ばえたものではあったが，Othello は武人としての非人間的な本性は潜在的に持ってはいるもののその実は情が細やかで高潔で，Iago の言葉からすれば Desdemona の夫としては申し分のない人であって，Desdemona に対するそのすさまじい jealousy も彼女に対する愛の大きさの裏返しであると思えば納得できるのであるが，一方実直で正義感が強そうにみえた外見の裏でただただ猜疑心の中で生まれた Casaubon の Dorothea への jealousy は理解に苦しむものである。Casaubon は確かに Dorothea に対して jealousy を感じてはいたが，Othello が悪漢 Iago のまことしやかなつくり話に翻弄されて亡想の中で Desdemona への計り知ることのできない深い深い愛ゆえの嫉妬にのたうちまわる姿に観衆が大きな哀れみと同情を感じるのとは全く異なり，その Casaubon の jealousy は Dorothea への愛から生まれたものでは決してなく，Dorothea と Dorothea への懸想を疑っていた Will Ladislaw 二人に対する陰質で意地悪な猜疑心の中でのみ生まれたものであるだけに，読者の同情を喚起するものは何もないのである。結局 Othello も Desdemona と共に Iago の奸計の犠牲者であって，彼の運命に Desdemona にもたらされた痛ましい運命よりもさらに大きな悲劇性を見るのであるが，一方 Casaubon が，由緒ある Casaubon 家の過去に秘められた不透明な部分を Dorothea に知られることの恐怖や他への不信感に根ざした jealousy を Dorothea に抱いて，Dorothea の尊敬と愛とを決定的に失った上に，五十年にも及ぶ生涯を通じて培ってきたものを何の実も結ばせることができないまま死を迎えることになったとしても，彼の人生には何の同情も何の悲劇性も感じることはできない。しかしただただ *Key to All Mythologies* の完成に向かって昼夜を分かたず勉励に勉励を重ねる真摯な彼の学究生活をつぶさに見た者にとっては，Dorothea と結婚したことから来る世俗的な苦悩による心の乱れが Casaubon の死期を早めたかもしれないということにささやかな憐憫を感じるのである。

以上のことからわかるように，Othello と Desdemona はお互いに強い愛を持ってはいたが人間として当然あるべき理性を欠いていたための破滅であって，Casaubon と Dorothea は逆に理想にのみかたより過ぎて二人の間に強い愛の絆が形成されなかったための不幸であったということができるであろう。実践的であるべき武人としてはめずらしく，ひじょうに理論的でかつ人に対する洞察力に優れた Iago は人間そのものや人間のもろもろの感情についてしばしば簡潔に的確に分析しているが，彼は love について，そして人生について次のように言っている。「love というやつも欲望の一種，つまりその新芽に過ぎない。」(27)「人生は天秤同

様，一方に理性（reason）の皿があって，こいつがいつも本能の（sensuality）の皿と釣り合いを保っていてくれないことには，おれたちはたちまち劣情の虜となり，目もあてられぬ最期をとげようというものである」。言うまでもなく人間は精神と肉体という二つの要素でできていて，全き人間の生は，精神的[27]な部分での reason と肉体的な部分の持つ sensuality がバランスを保っていなければならないのである。しかし Othello の属する武人の世界は，どちらかといえば理論よりも行動と実践の世界であり，そこでの功績によって武人の最高位である general にまでのし上がった Othello が，抜群の行動力実践力の陰に思考力すなわち理性が欠けていたのは当然のことであり，また Casaubon は逆に，長年の学究生活によって physical な部分は余り発達せずに mental な領域でしか生きられなくなってしまっている状態も必然のことであったのである。すなわち Othello と Desdemona は欲望におぼれて理性をなくし，Casaubon と Dorothea は理性で極度に欲望をおさえてしまうというようなバランスを欠いた結婚をしてしまったのであって，彼ら二つのカップルの運命の類似性の根源は究極的にはその両極端にある彼らの結婚のあり方にあったといえるであろう。

(12)

この *Othello* の劇と，Dorothea, Casaubon の劇の類似性を考える上でもう一つ忘れてはならないものは，*Othello* における Iago の役割と，Casaubon のおばの孫である Will Ladislaw の，Dorothea, Casaubon の story における役割の類似性である。Iago は Othello の欠けていた論理的思考能力に秀で Othello の力に対する思考で，結果として行動力実践力では右に出る者のいない将軍 Othello を制覇する。Will Ladislaw もまた Casaubon の，若く美しい妻 Dorothea への愛の欠如に対峙し，Dorothea に対して純粋かつ絶対的な愛を捧げる存在として彼らの前に現れる。そしてその愛で Will は，Casaubon が Dorothea との婚約時に作り公開してあった遺書に死の直前につけ足した，もし Dorothea が自分の死後 Will と再婚するようになった場合にはその膨大な遺産の一部なりとも Dorothea には渡すことはできないという意地悪な補足にもめげず結果として Casaubon を制覇し，Dorothea の心を獲得することに成功している。しかし *Othello* のテーマが，いわゆる big な人でありながらそういった論理的思考が苦手であるいわゆる単純でだまされ易い男がまんまと謀られ，そして周りの人々までまきこんでいく悲劇であり，その陰謀によって drama の主導権を絶えず握っている Iago の存在は，心の中に隠蔽することができずに即実践実行に向かう Othello の陽に対して陰の部分でうごめく恐ろしいものであるが，Dorothea と Casaubon の story の中での Will は，Dorothea の，自分ではどうしても憎悪しか感じない Casaubon に心から献身的に尽くし彼をいたわるこうごうしい姿をむしろ愛していたのであり，そういうすでに人妻である Dorothea への恋愛・結婚のうしろ暗さが混じらない愛を表わす者として陽であるのに対して，彼らをおとしめようとする謀り事を胸に秘めた Casaubon の方がむしろ陰となって小説に作用している。それは主だった登場人物の死以外には全く救いのない Shakespeare 悲劇と，自分の所属する小さな共同体の中で生きることの苦悩と葛藤を通じて再生に向かう生を

描く George Eliot の小説との差異であろう。すなわち Iago は Othello をいかに完璧に操って破滅に導くか，いかに *Othello* の劇を大悲劇に仕立てるか，つまり自分も含めていかにその主だった登場人物に情け容赦ない死を与えるかの錠を握る存在であり，Ladislaw は苦悩し葛藤する Dorothea の救済であり，愛のない Casaubon からいかにして Dorothea を救うかの錠を握る存在であったのである。そしてそういった Iago の *Othello* の劇の中における存在意義がすなわち *Othello* のテーマであったのと同じく，Ladislaw が Casaubon, Dorothea の story の中で演ずるその役割が Casaubon, Dorothea の story のテーマなのであった。夫に対する妻の duties を殊の外重要視する Dorothea は，Ladislaw が自分の救済であることにはなかなか気付くことはなかったが，Casaubon が死に際して，Dorothea に対して一かけらの愛の印すら残さなかったばかりか，この章の前にも述べたような Casaubon が遺書に付記した意地悪な仕打ちに亡き夫 Casaubon への duties の観念はふっきれて，Will Ladislaw への愛にめざめていくのである。この，Casaubon の second cousin でありながら彼のおばあさんの不祥事によって低い身分に転落し，定職も財産もないいわゆるジプシーである Ladislaw との Dorothea の結婚は，多くの批評家の批判の的となる展開であるが，これは彼らの言うような小説構成上の失敗では決してなく，George Eliot の人間観が表われた重要なポイントであると思われる。つまりがんこでゆうずうのきかない正義感のかたまりのような Adam Bede が不埒な農民の娘 Hetty Sorrel と熱烈な恋に陥ったり，また同じ Methodist の仲間である Adam の弟 Seth の求婚を断り，宗教にはほとんど関心のない Adam と最終的に結婚するようになった女伝導者 Dinah や，また *Felix Holt* で，貴族的な趣向の強かった誇り高い性格であったにもかかわらず，貴族である Harold の求婚を断って貧しい社会運動家 Felix と結婚した Esther 等々の人生に見られるように，George Eliot は人間の性格や人生を絶対不変なものとはせずに，特に大きくその運命を変えることになる可能性の高い結婚が前提としてある女性の性格や人生は，変容可能なものとして彼らの属する地域共同体とのかかわりの中で作られていくものであると考える。それゆえ Dorothea の Saint Theresa をも彷彿とさせた燃えるような崇高な理想と向学心を彼女の心の中から滅却させて，そして彼女を結局 Ladislaw の妻となり，そして彼との間の子供の母であることに落ちつかせた力は，因襲的な考え方に縛られた Middlemarch という町以外の何物でもなかったのである。そして Dorothea について George Eliot は彼女が *Middlemarch* に登場する極めて早い段階ですでに Dorothea の，Casaubon とは考え方も生き方においても全く異なっている Ladislaw との結婚における良妻賢母への変容を Dorothea の手についての powerful, feminine, maternal hand という言及[28]で暗示しているのである。Dorothea は Ladislaw との愛について単に 'If I love him too much it is because he has been used so ill' とだけ言っているけれども，「若い未亡人は必ず近い将来において再婚するものとして遇し，そしてもしその未亡人が彼らの思わくどおりに行動するならば意味ありげにほほえむ」Middlemarch の人々の中にあって周囲の人々の思わくよりも個を大切にする新しい時代の萌芽を秘めた異端者である Dorothea の再婚相手は同じように異端者であった Will Ladislaw より他にはな

かったであろう。(1996年12月1日完)

注

(1) 上田女子短期大学紀要十六号（1993年3月刊）

(2) 上田女子短期大学紀要十八号（1995年3月刊）注参照

(3) 上田女子短期大学紀要十六号（1993年3月）(1)参照

(4) *Middlemarch,* chap 16

(5) 1832年 Reform Bill が英国議会を通過し，その前後はイギリス各地で暴動が起こったり，不穏な動きがあった。上田女子短期大学紀要十六号参照。

(6) Ariadne：ギリシャ神話で，クレタ王ミノスの娘。ミノタウロス退治にきたテセウスに恋し，糸玉を与えて迷路を通りぬけさせた。

(7) *Middlemarch,* chap. 19

(8) 同上 chap. I

(9) Methodist の伝導者：地主の息子 Arthur との間の嬰児を殺害した農民の娘 Hetty Sorrel に罪の自白をさせた。

(10) fond of : loving foolishly or too much

(11) love : strong or passionate affection for a person of the opposite sex

(12) affection : friendly feeling : tenderness

(13) *The Story Bible* by Peal S. Buck

(14) *Good News Bible* 1865 Broadway New York, New York 1002 American Bible Society

(15) Shakespeare : Willam Shakespeare 1564-1616 イギリスの劇作家，詩人。文学史上不朽の人間像を創造。四大悲劇 *Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth* のほかに *Romeo and Juliet, The Marchant of Venice, A Midsummer Night Dream* などがある。

(16) *Othello*; Shakespeare の四大悲劇の一つ。1604年頃初演。Moor 人の将軍 Othello は，部下の Iago の計略にかかって妻 Desdemona の貞節を疑い殺すが，後に真相を知り自ら死ぬ。

(17) *Middlemarch, chap*8.

(18) Act V, Sc II，福田恆存訳『オセロー』新潮社，昭和53年12月30日

(19) Moor 人：ヨーロッパ人が，北西アフリカに住むイスラム教徒を広くさした呼称。のち転じてイスラム教徒全般にも言った。

(20) 上田女子短期大学紀要十八号（1995年3月）

(21) *"Hop o'my Thumb"*; フランスの詩人・童話作家ペロー（1628—1703）の作

(22) *Middlemarch, chap*8.

(23) Act I Sc III 'And little of this great world can I speak,' *Othello* Methuen & Co LTD New Fetter Lane London EC4P 4EE

(24) 同上 福田恆存訳

(25) Nemesis：ギリシャ神話で人間の思い上がりに対する神の憤りと罰とを擬人化した女神

(26) Desdemona は死に際して，死後神に救われるための最期の祈りすら Othello にさせてもらえなかった。

(27) 『オセロー』第一幕第三場 同上新潮社 福田恆存訳

(28) Dorothea の「女らしい，母となるべき手」という言及は chap4 と chap83 と二カ所にある。

参考文献

『ジョージ・エリオットの小説』和知誠之助著㈱南雲堂　1980年3月
『ジョージ・エリオットの小説』藤田清次著㈱北星堂書店　昭和52年7月
『シェイクスピア四大悲劇の鑑賞』本田顕彰著　昭和39年10月　法政大学出版局
Adam Bede by George Eliot, New Amerrican Library Publishes signet, Mentor, Classic, Plume & Meridian Books, 1961
Felix Holt by George Eliot, Penguine Classics, 1987
Thorndike・Barnhart Comprehensive Desk Dictionary ㈱開拓社　昭和37年2月
「大辞林」三省堂．1990年3月